

---

# 待ち人～春雷シリーズ番外編

大沢 綾子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

待ち人〜春雷シリーズ番外編

### 【Nコード】

N0063J

### 【作者名】

大沢 綾子

### 【あらすじ】

警視庁の一角にある極秘捜査専門部署に勤務する、神谷昂。その特殊能力のために彼は刑事になり、その能力がアダになって死にかかった。元ホストという経歴を持つ神谷の、「まほろば」後の閑話休題的なストーリー。

神谷昴は、いかにも人を待っている風情でホテルのロビーにあるラウンジにいた。

そのホテルを指定したのは、彼ではない。これから会う相手の希望で、そして神谷はじぶんの携帯が鳴らされるのを待っている。

コーヒ一杯の値段のためもあるが、今日は平日。おまけに中途半端な午後の時間には、ラウンジにいる客もまばらだ。だから神谷は、なおさらのんびりと相手を待っている。座り心地のいいソファの肘掛に腕を預けて、頬杖をつきながら眺めているのは英国風の庭園だ。小川で区切られた人工の小島には、色とりどりの秋の花が咲いている。空は青く澄み渡り、なんだか飛べそうなほど高い。

その神谷の容姿や服装を見て、職業を言い当てられる人間はおそらく皆無だろう。

およそ肉体労働には向きそうにないすらりとした長身は、ネイビー・ブルーのハイネックのセーターに包まれている。下はデザインーズ・ジーンズに先の尖った革靴で、左の手首にはロレックス。隣のソファに投げられているのは、白いスプリング・コート。

どこかもの憂そうに外に向けられている顔は、男臭さとは縁遠い甘いマスクだ。襟足にかかる髪は外側にはねて、雰囲気がある。

こういう時間は、いまの神谷にとっては貴重だった。普段の神谷は、拘束時間もあいまいな仕事をしている。今日の休暇も、有給ではなく代休。有給休暇などは、この3年まともに消化したことがなかった。この休みにしたところで、上司はいつしゅん捺印する手を止めていた。

(すこしは、俺を休ませろよ……)

その上司の顔を思い浮かべて、神谷は仕方がなさそうに微笑む。

あの男が休日はどうすごしているかなど、とても想像がつかないのだ。ひよっとしたらあの広い職場のどこかに部屋があって、住んで

いるんじゃないかと錯覚するぐらいだ。もっとももつ、それが間違いないのはわかっている。

(ほんつとに、仕事バカ)

あの仕事のなになが、そんなに使命感を燃やさせるのかわからない。あの男にとつては、生きて呼吸することさえもが職務に直結しているようなものだ。3年以上昔に夜の街で声をかけてきたときも、あの男の目に映っていたのは神谷の容姿ではなく埋もれていた能力のためだった。

いつか、そのせいで命を落とすぞ。

なにを寝ぼけてんだよ、とそのとき神谷は思ったものだ。おもしろおかしく、なんの責任も束縛もない人生を送っていた神谷は、その脅しに負けたわけではない。男の言葉になど、なんの注意も払わなかった。でも、しつこいぐらいに男は神谷を口説いて、最後に言った。

俺のところに、来い。

その言葉にこめられた強さに、神谷は夜の世界から足を洗った。

思えばそれが、始まり。

(知らないでしょう……八代さん。俺は、あなたが好きなんだ)

あの言葉を信じて、言いながらじぶんを見つめてきた瞳に恋に落ちた。涼しげな二重まぶたの、独特な瞳にいまも恋をしている。

しかし神谷の気持ちになど、八代が気づくわけがない。あの男の頭のなかは、仕事でいっぱいだ。それこそ、私生活などないに等しい生活を送っているながら、それを何とも思っていない。やらねばならないとなったら徹夜してでも職務を遂行するし、行かねばならないとなれば日本の端から端まで移動する。

そして　じぶんのパートナーを守ることにかけては、一級品の責任感を持っている。

(……馬鹿)

本当の馬鹿はじぶんだと、神谷はわかっている。

八代に誉めてほしくて、もう一人前だと言ってほしくて　そし

て神谷は死にかけた。ひと月経っても、どうやらまだ怒っている。それを思うと、毎日おなじ職場にいるのも辛かった。しかも、仕事で外に出るとなれば八代はパートナーなのだ。

そういうときに、電話がかかってきた。

神谷がこのラウンジで紅茶を飲みながら待っているのは、女だった。

昔の仕事　ホストをしていた時に知り合った、客のひとり。歳は神谷より20も上だが、なぜか続いている。むしろ、ホストとして会っていたときよりも、いまのほうが親しい。そして、神谷は50も手前の彼女をむかしよりもずっと、美しいと思っていた。

持ち物にはうるさくて、ブランド物ではなく「本物」の好きな女。日本人には珍しく、何をするにも「自分」優先ではつきりものを言う。女実業家として世界中にマンションやコテージを持っているし、精力的に飛び回っていた。だから、滅多には会わない。会うときも向こうの都合が優先で、そしてそれが楽しいのだ。

笹倉彩香　通称、マダム・S。

みながそう呼ぶのは、5回も結婚をしてくるくる苗字が変わったためだ。

(いまは、男がいるのかな……)

いても神谷は構わない。もうすでに、そういう関係ではないからだ。絶対にだれも信じないだろうが、彼女と神谷の関係は親しい友人同士。親友といってもいい状態だった。

だから、神谷のいまの職業について彼女だけは知っている。

会うのは久しぶりだ。最後に会ったのは今年の春先だから、半年以上経っている。だから神谷も、それなりに気を遣って装ってきた。ロレックスは宝石のない渋めのデザインだし、靴も職人がつくったオーダーメイド。そして、彼女から贈られた指輪を忘れずに嵌めてきた。

そういっじぶんを考えると、いまの仕事はやはり向いていない、と思ってしまう。

神谷の職業は、刑事　警視庁にある部署のなかでも特異な事件しか扱わない。おまけに神谷たちは「犯人を逮捕」などしない。事件は闇から闇に葬られて捜査ファイルも存在しないし、「犯人」は抹殺される運命だ。

かといって、神谷たちは人殺しではない。彼らが抹殺する相手は、人ではないモノ　民話や都市伝説に出てくるような、人間に危害を加える魔物相手に闘っていた。

そして、ひと月前に神谷は死にかかった。

（俺もう……相棒はずされるのかな）

それともお役御免だろうか、と考えただけで神谷は切なさのあまりくちびるを噛んだ。もともとから正規の手続きを踏んで刑事になったわけではない。神谷は警察の内規もよくわかっていないし、そもそも警察学校さえ行かなかった。拳銃に触ったこともなければ、逮捕術のいるはも知らない。

（だって、俺……）

八代がいまの神谷を創ったのだ。それを言うなら、警視庁のあの部屋にいる刑事たちの大半は八代がスカウトした。だから　あらゆる意味で神谷には、八代がないことなど考えられない。

ただの部下で十分だった。こんな妙な能力を持って生まれてきてそのせいで、自分の居場所というものが不確かなままで生きてきた。八代に会ったおかげで初めて、地に足をつけて生きることが出来たのだ。

神谷は、きちんとした人間らしい食事をしなくとも、魔物の精気を吸い取ることでも生命を維持できる。吸い取るのは、魔物のものだけではない。人間の中に潜むにこった欲望や、暗い感情も代用品になった。だから、神谷はホストとしてナンバーワンだったのだ。容姿だけが人気の理由ではない。

金持ちのご婦人たちは、ときには神谷に肩を抱かれているだけで満足して、何十万と店に金を落とした。神谷の両隣の席は、誰にとっても妙に肩が軽くなって気分の明るくなる場所として競争が激し

かった。

そして、だから神谷は彩香が好きなのだ。

コートのポケットで、携帯が振動する。それを取り出して、耳にあてると柔らかくて暖かいハスキー・ボイスが流れてきた。

「コウ……どこ？」

「俺？ いま、言われたラウンジにいるよ」

じゃあ、表に出てきて、と言われて神谷はコートを手にラウンジを出た。

笹倉彩香は、いつ見ても上品でゴージャスな女だった。完璧に自立していて、彼女の場合は専業主婦になってもまったく変わらないだろうと神谷は思う。

とても50が近いとは思えないほど澁刺として、目尻のしわでさえ計算されたように美しい。すこし崩れた身体のラインも、女らしい色気となっている。

「ドライブ？」

「そう、どこへ行く？」

彼女が用意させたレンタカーは真赤な高級スポーツカー。ガソリンを恥知らずなほど喰うイタ車だ。神谷は助手席に乗り込むと、どこでも、と答えてちよっと睨まれていた。そういう表情でさえ、やはり美しいと思った。

「それじゃ、遊園地は？ テーマ・パークでもいいわ」

神谷の返事を待たずにもう、彼女は車を出していた。

「俺は、どこでもいいよ。あなたといられるなら」

「……馬鹿ね」

だが、すでに決めてしまったらしい。だいたい、神谷の返事を待っていたら日が暮れてしまう、とわかっているのだ。そういうところも、神谷は好きだった。自分が欲しいものをよくわかっているからだ。

彼女の欲望は、おそらくどんな女よりも大きくて深い。そのくせ、彼女はそれをないもののように振る舞ったり、隠したりしないから、だから神谷は彼女の暗い感情を吸い取らなくても良かった。白日の下に晒してしまった欲望は、もはや健全なものでしかない。

「相変わらず、免許はないの？」

「ないね。取ってる暇なんかありやしねえし」

彼女の問いに、神谷はうんざりした様子で答えた。ゆっくり眠る暇さえないときもある。正直なところ、自動車教習所に通う暇があるなら自堕落にすごしたい。

隣では、見事なハンドルさばきで車を操る彼女がいる。彼女の運転は、まるでスピード狂の男みたいに思い切りがいい。

「あまり飛ばすと、捕まるよ。今日の俺は警察バツジはないからね」  
「いいのよ、と彼女はたのしそうな笑い声をあげていた。そうして、笑顔をおさめてふと真面目な顔で神谷を振り向く。

「コウ……見せて」

何のことはすぐにわかった。神谷はおとなしくセーターの襟を指で押し下げると、見やすいように頭をのけぞらせていた。さらけ出された白い喉には、醜い傷跡がある。癒着した跡がひきつれて変色した筋を描いていた。

「……ひどいわ」

息をのんで 呻くように感想を洩らす。神谷はちいさく笑って、襟を戻した。

「いいんだよ。どうせもう、身体で稼いでるわけじゃないし」

「そうだろうけど、と彼女はくやしそうに言う。」

「仕事で失敗して、自分でつけた傷だよ。彩香がこれで俺を嫌いにならないなら、それでいいし……俺には、残って良かった」

「どうして」

「これは、俺の自戒だよ」

呟いて、神谷はウインドウの外を流れていく景色に視線をやっていた。



その事件の夜 必死の形相で車を運転している八代の隣で、神谷は死にかかっていた。

魔物の精気を吸いすぎて身体のなかで暴れまわるそれに、神谷の心臓も呼吸も何度も止まった。そのつど、神谷を蘇生させるのは上司でパートナーの八代だ。八代の怒りは激烈で、困ったことに神谷は望みもしないのに無意識に、八代のそれさえ吸い取っていく。

呼吸のままならない苦しさに、自分で自分の喉をかきむしって鮮血を噴き出させながら、その瞬間は本気で死んだほうがマシだと思いい、もう少しで八代に、殺して、と頼むところまできていた。

そうして担ぎ込まれた八代のマンションで、神谷は文字通り心臓をつかまれるような八代の言葉を聞いた。

いいか、これで死んだら俺は一生おまえを許さない。

それは神谷にとって、愛の言葉と同義語だ。だから神谷は、それで一生この男の心にじぶんが残るなら、死んでもいいと思う。しかし、そういう馬鹿げた考えは、八代が始めた「浄化」の修法に霧散した。

冷たい液体を全身に撒き散らされてびしょ濡れになったところまでは、良かった。そのあとに襲いかかった激痛に、神谷は泣き叫んでいた。涙で曇る視界には、青白く燃えるじぶんの身体が見えていた。頭上では、八代の唱える呪<sup>シユ</sup>が途切れることなく続いて、じぶんを包んでいる。

その炎には、温度はない。肉の焦げる匂いもない。

だが、神谷はたしかに生きながら焼かれていた。

苦痛にのたうちまわり、逃れようと暴れても、背中に乗った八代の膝はびくともしない。全身に沁みこんでいた魔物の精気が、次第に縊り合わされて一箇所に集中する。胃のあたりに、どす黒い塊が出来て膨れ上がってくるのを、神谷は猛烈な吐き気とともに意識した。

うつぶせに、ベッドの縁から顔を床に向けさせられながら、神谷は苦しみのあまり震える手を宙に　　縋るもの欲しさに彷徨わせる。その手を、八代の手が握っていた。その瞬間、八代の早九字が背中であつて、ドン、と強烈なエネルギーがぶつかってきた。

ぐうつ、と神谷の喉をこじあけて、それが押されてあふれだす。

真っ黒な、タールのような塊。最後の最後にまた、呼吸の出来な  
い苦しみが神谷を襲う。ゴホツ、と咳き込んだところで全てが出て  
いた。それは、ねっとりとした質量でカーペットの上に広がった。

同時に、背中にあつた八代の体重が消えてしまう。

かすむ視界の中で、人型に切り抜かれた形代がその真ん中に落ちていく。そうして、次には青白い炎に包まれて、あとかたもなく消えた。

(助かった……?)

異様に重かつた身体から解放されると生ぬるい開放感が訪れて、  
神谷はそのまま気を失っていた。

「生きていて、よかつたわ」

彼女が車を停めたのは、人気のない海岸。波打ち際を手をつないで歩きながら、潮騒のなかで神谷は頷く。顔にかかる彼女の髪を、そつと払いのけてやった。

「あなたのためだけじゃなくて、わたしのためにも、そしてその人のためにもね」

「八代さん？」

神谷は意味がわからなくて、不思議そうに肩の下にある彼女を見下ろす。夕焼けがべつの化粧をほどこしている彼女の笑顔を、きれいだと思う。

「あなたに何かあつたら、その人は一生じぶんを責めることになるよ。そうならないだけでも、良かつたでしょう」

思わず、神谷は足を止めていた。

「……俺」

「想像もしなかったのね」

その通りだ 神谷は考えもしなかった。

歩きましょう、と神谷は手をひかれてまた波打ち際を進む。まるで、子供にでもなった気分だ。暖かくてやわらかな手は、神谷のそれよりも小さい。だが、八代の手はじぶんのそれより無骨で大きく力強かった。

「でも……彩香。彼はまだ、俺に怒ってる」

それが、悲しい。

表面上はもういつも通りで、一緒に現場に出るし捜査もやる。だが、八代がしつこい怒りを飼っていることは、神谷にはわかる。そばにいと、いつのまにか八代の感情を吸い取っているからだ。

返ってきた答えは、笑いを含んだ「馬鹿ねえ」というものだった。「コウは、そういうところが子供のままね。会うたびに、男っぽくなってはいくけど……馬鹿にもなっている。あなた、彼に謝ったの？」

今度こそ、本当に神谷は突っ立ったままだった。

謝っていなかった。

もう、二度とあんな真似はしない、と八代に言っていない。鏡を見るたびに映る喉に刻まれた醜い傷に、あのときの恐怖を思い出していたくせに、八代にそれを言っていないかった。

「謝ったら……彼、赦してくれる？」

俯いて、泣きべそをかく子供みたいに訊いた。手がのびてきて、彼女は神谷の高い位置にある頭をそつと抱き寄せてくれた。

「コウのことをわかってあげられる人は、きっと少ないと思うわ。あなたは、見かけが良すぎるから……でも、その人は大丈夫でしょう」

それだけでもいい。

彼女がそう言うなら、神谷はそれを信じたい。

これから先も、八代の隣でパートナーとして仕事が出来ればそれ

でいい。恋など 神谷にとっては、知らない世界だ。ましてや、男に恋をして、それでどうなるかなんて想像も出来ない。もっと悪いことに、八代の場合はまるで石像を相手にするようなものだ。あれほど事件の背景への洞察力も、人間心理にも精通していながら、じぶんについては注意を払う気もないのだ。

「俺、彼のが好きなんだ……」

ひどく素直にそう告白する。年上の女に甘えているじぶんが、ひどく恥かしい。

「わかつているわよ」

ぼんぼん、と背中を叩かれて顔を上げると、神谷は照れ臭そうに微笑んだ。

謝りたい 謝らなくちゃ。

そう思ったら矢も楯もたまらずに落着きをなくした神谷は、彼女に思いっきり笑われた。

男はみんな、きれいな蝶々を追いかけて迷子になる子供よ。夢中になったら、それしか見えなくなるんだから。

それでも、約束を半分しか果たさなかった神谷のために、車首を八代のマンションへと向けてくれた。

「……コウ」

「うん、ごめん」

歩道に降り立って、神谷は彼女を見下ろす。

「つぎは、ちゃんとわたしを見てなさい」

強烈な自己主張をするスポーツカーのテールランプを見送って、神谷は不安とともに八代のマンションを見上げる。覚えている部屋番号から、部屋の明かりを探した。

（まだ……仕事？）

ありえないことではない。

どうしようかと迷いながら、神谷はマンションのエントランスで

部屋番号を押せずにいた。そうして逡巡した拳句に、ため息をついて諦める。部屋の窓はまつくらだから、押したところで意味がないことにやっと気づいたのだ。

だが、マンシヨンの敷地は出たものの、そこから完全に立ち去ることが出来ない。今夜謝ってしまわなければ、もうチャンスはないような気がする。明日、職場で八代のデスクの前に立って謝ってもじぶんの本気は伝わらないと思う。そして、そうやって躊躇っているうちには、じぶんはまた謝る機会を逃すのだ。

八代は今日、車だったか歩きだったかと思いつながら、神谷は敷地を囲む歩道のそばの花壇に腰を下ろした。

秋口の冷たい風が吹いて、コートの襟をはためかせる。そこからは、潮の香りがしていた。神谷は襟をひっぱって、そこに形のいい鼻をうずめた。塩っけでべたついた髪からも、磯の匂いが立ち上ってきた。

目を閉じて　その香りを吸い込んだ。

そのままでしたら、その香りの中になんか生々しい食い物の匂いが混じっていた。はっとして目をひらくと、目の前に暗い色のスーツが映っていた。

「なにを、している」

頭上から降ってきたのは、上司の声だ。

「あ、や、八代さん……」

慌てて立ち上がろうとして、そうすると八代の胸にぶつかることになり気付いていた。仕方なく顔だけ仰向けて　神谷はいまでも恋をしている八代の瞳をまとも見ていた。

「あの、俺……」

つめたい瞳だろうか。

それとも、ただ無表情なんだろうか。

じぶんに恋をして、とは言わないから　せめて、少しでいいからその瞳をやわらかくしてほしいと思う。

「八代さん……俺、二度としない。あんな勝手はもう、しない……」

やりません」

本当なら、きちんと頭のひとつも下げて謝りたいのだが、それが出来ない。それどころか、首が痛くなるほど傾けているよりほかに、八代をちゃんと見る方法がなかった。だから神谷は、ただ返事を待って八代の瞳を見つめ続けた。

独特の力を秘めた瞳　魔物を見るときには、それが燐光を放って青く光る。

「おまえは、それだけ言うのに一か月もいるのか。どれだけ頭の配線が複雑なんだ。それとも、どこかで断線してるんじゃないだろうな」

八代の声に、苦笑が混じっている　それを感じて、神谷はすこし泣きそうになった。

「だいたい、来るなら来るで携帯鳴らせよ。弁当は一人前しかないぞ。それとも、もう食ってきたか？」

「……まだ。あ、でも俺いいです！　もう、帰るか……ら」

神谷の言葉は、尻つぼみに口の中に消えていく。八代の手が、猫の仔を掴むようにじぶんのうなじを掴んで問答無用で立たせて、マシオンへと引っ張っていく。

(八代さん……)

堪えていたものが、あふれた。

きつく閉じたまぶたの裏が熱くなって　なんとか涙を払おうとしたにもかかわらず、こぼれる。と同時に、小さく声が漏れていた。そんな自分の頭を、八代の腕が包んで肩に押しつける。

「神谷……」

「は、はい」

涙声で、神谷は慌てて返事をする。

「おまえは馬鹿だよ。つけなくていい傷を、そんな目立つところにつけて。おかげで俺はそれを見るたびに、死にかけていたおまえを思い出す」

「……すみません」

肩を組むようにして歩いて 足元を見なくても、八代がちゃんと誘導してくれるから、神谷は安心して目をつぶったままにいる。

「おまえは、俺が見つけて連れてきた。こんな世界に。だから、俺がいいというまで側を離れるなよ」

はい、と神谷は頷く。

(はい……絶対、離れません)

八代が行くところなら、どこへでも行く。危地に飛び込むなら、一緒になって飛び込む。そうしていつかは、肩を並べて 八代の背中を守るようになりたい。

エントランスでやっと、八代の腕がほどかれる。ふっと消えてしまった温もりに、神谷は別の涙を浮かべた。

「ところで……八代さん」

「なんだ」

「それ、なに弁当？」

じぶんの気持ちを隠すために、神谷はいい匂いにするビニール袋の中身を訊いていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0063j/>

---

待ち人～春雷シリーズ番外編

2010年10月8日15時21分発行